

カエルたちのトラブル

大阪教育大学 佐久間敦史

府内の幼稚園でのこと。3～5歳児の、この日のテーマは「カエル」遊び。3歳児は、かわいい「オタマジャクシ」ですし、5歳児は大人の「カエル」です。遊戯室では、カエルたちの家や遊び場があり、みなカエルになりきって遊んでいます。ひな壇では、カエルのポーズでうれしそうに歌っていますし、オタマジャクシのポーズで楽しんで聴いています。幼児期には、こうした「遊びを通した学び」が非常に重要で、思考（模倣、再現、想像、表現等）し成長していきます。

そんなとき、カエルたちの間で、何やらトラブルが起きました。「オタマジャクシの前でずっと歌いたいのに、替わってくれと言われる」と涙目で訴えるカエル、「いつも〇〇ちゃんが舞台にいて、待っていても意味がない」と怒るカエル、そのカエルに「オマエは後！」と言われ、「オマエ」という言われ方に泣き出すカエルまで現れました。さて、どうしたものでしょう。「順番に交替しなさい」「オマエなんて言ったらだめでしょ」「謝りなさい」「ごめんね」「いいよ」と、事を収めるのは簡単です。しかしそれでは、大人に叱られたからやめておく、大人に叱られたから謝るという段階で留まります。

そのとき、しばらく見守っていた先生がそっと近づき、それぞれのカエルたちの話を聞きました。ですが、説諭やアドバイスはしません。それぞれの言い分を丁寧に聞き、「そう…、〇〇カエルさんも、オタマジャクシの前で歌いたいよね」「そう…、オマエって言われたから悲しかったのね」と、それぞれの言葉を落ち着いて繰り返します。そうするうちに、自分の行為が相手にどのように映っていたのかを自覚し、3人とも落ち着き始めました。そして、「替わるよ」「うん」「ごめんね」と穏やかなムードになりました。すると、すかさず先生が、楽しい曲をピアノで弾き出しました。みな、笑顔で楽しそうに歌いながら集まってきました。先ほどの3人も、もう笑顔です。プロだなと思いました。

もし大人（教師）が、権力や暴力（体罰）でもって従わせるような指導をすれば、物事は権力や暴力でもって解決する、威圧的に友だちに振る舞えば解決すると、幼い子どもたちは無自覚に学びます。そうしたことを教育現場では、「隠れたカリキュラム」と呼んでいます。そうではなくて、先生がうまく他者の気持ちや権利に気づくように仕向ける。さらに、気づいた後にはより楽しいムードになるようにリードする。こうした穏やかな、一人ひとりが大切にされる、「人権のムード」に満ちあれた学校園で、人権感覚は醸成されます。